

第2節 国指定史跡浅間古墳の再検討

佐藤 祐樹

はじめに

静岡県富士市増川に所在する浅間古墳は、古墳時代を通じて静岡県内最大規模を有する前方後方墳であり、駿河湾全体から望むことのできる立地から「海浜型前方後円（方）墳」に位置づけられる典型的な古墳といえる（広瀬 2013）。近年では、沼津市高尾山古墳や三島市向山 16 号墳、函南町瓢箪山古墳など東駿河・伊豆における前期古墳の発見が相次いでいるものの、浅間古墳がもつ重要性に変わりはない。

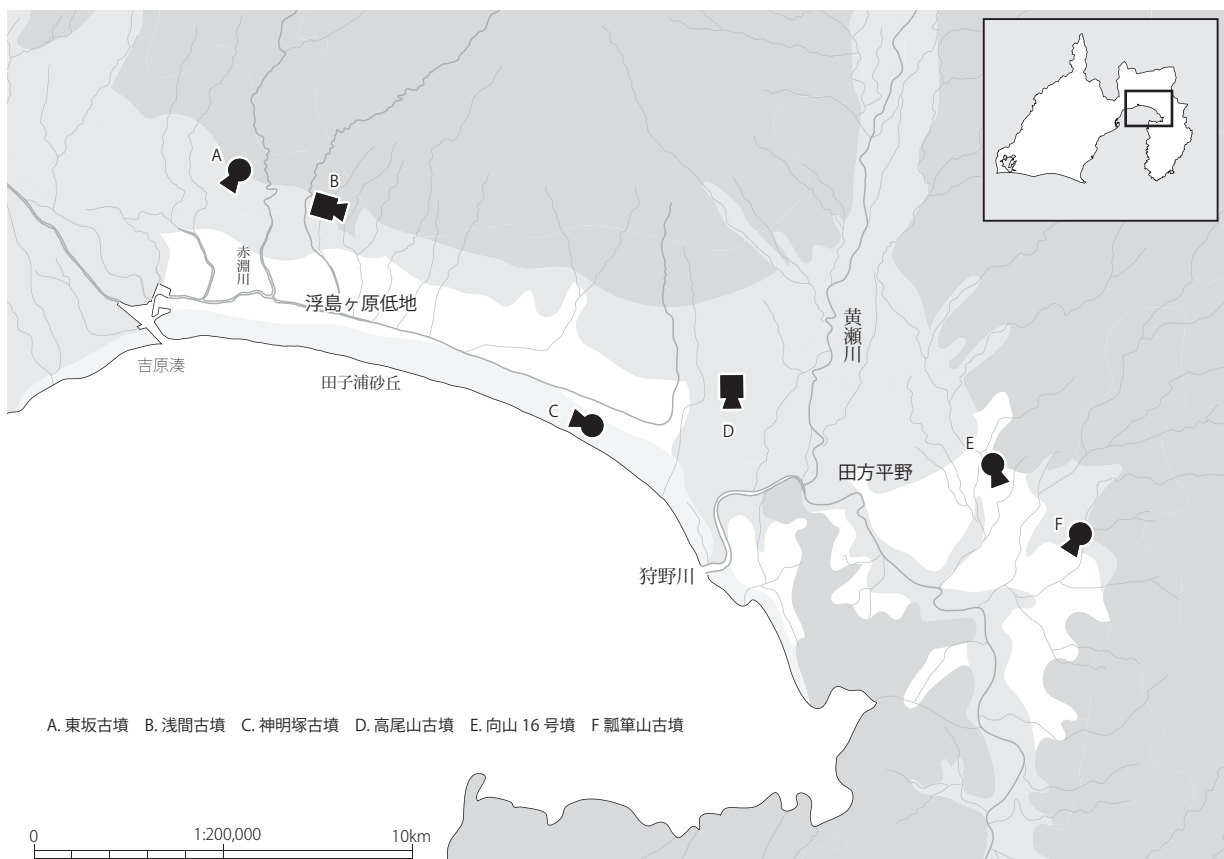
これまでに発掘調査が行なわれたことはないものの 1997 年には静岡県教育委員会から委託を受けた静岡大学人文学部考古学研究室により詳細な測量調査が実施されている。

本論ではこれまでの所見や墳丘復元を再検討し、新たに墳丘に対する所見や復元図を示すことを目的とする。

1 これまでの調査成果

浅間古墳におけるこれまでの研究史は 1998 年の報文に詳しい（静岡大学人文学部考古学研究室 1998、以下「1998 報文」とする。）。研究史上、特に重要なのは永らく前方後円墳と認識されてきた浅間古墳に対して測量図を示しながら前方後方墳であることを指摘した内藤晃氏の報文である（内藤 1958）。さらに長軸 103m、後方部幅 61m、同高 11.8m、前方部幅 40m、同高 8m という復元値を提示した点は、現在まで続く、浅間古墳における基礎的な研究の定点ともいえる。

また、前述の 1998 報文では「墳丘約 90m、後方部長約 60m、南西側墳裾からの後方部高約 10m の前方後方墳である」とされ、後方部二段、前方部一段の墳丘復元がされた。また、明確な記述はないが墳丘復元図上では墳長 92.3m 程度の大きさが示されている。



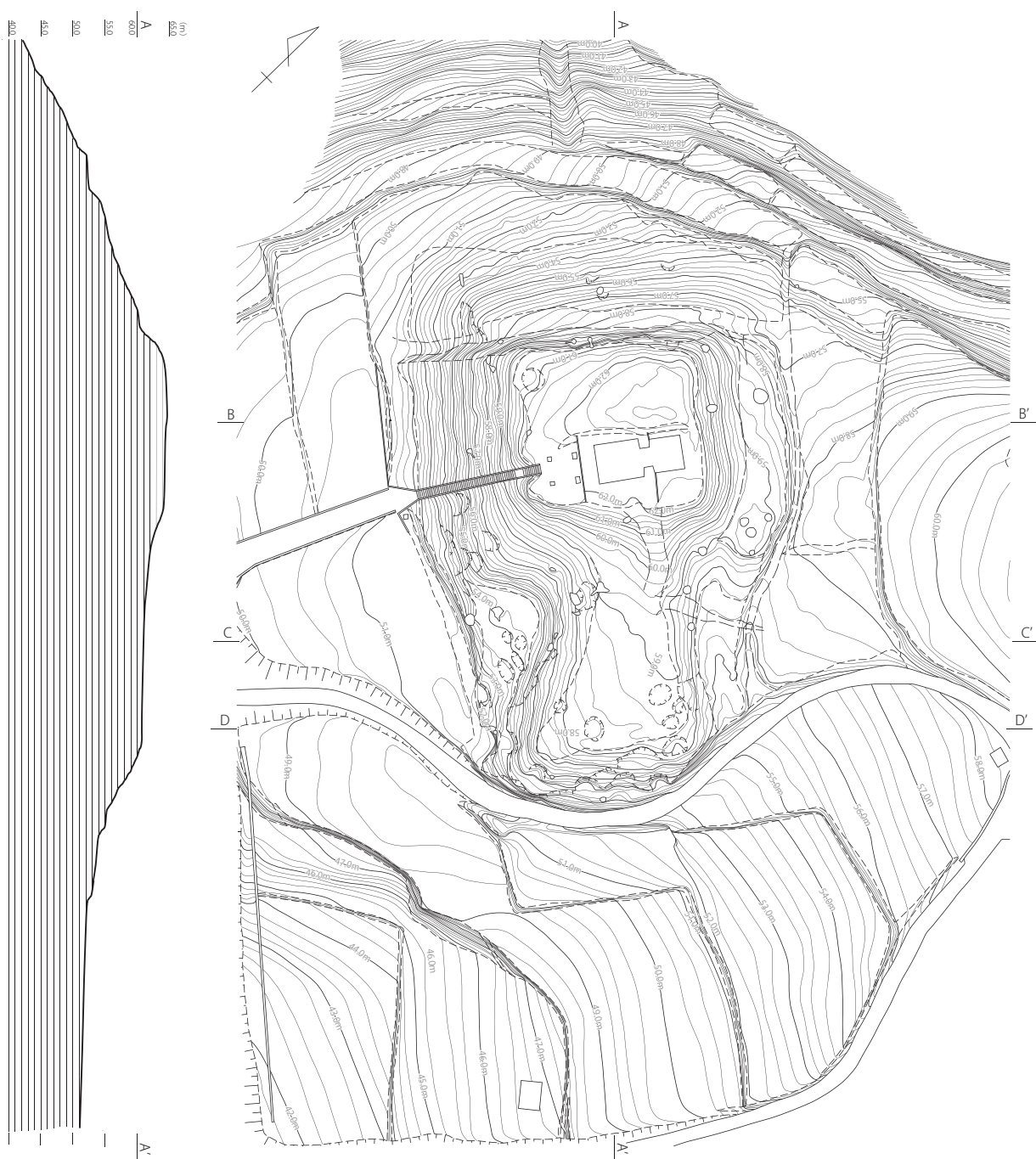
第 180 図 東駿河・伊豆における前期古墳

2 墳丘の再検討

墳丘各所における事実記載については1998 報文にあるので詳細はそちらに譲り、今回は大きく異なる所見について述べていくこととする。

浅間古墳の最大の特徴ともいえる南側（海側）からの正面観に関連しての墳丘のあり方、特にくびれ部の解釈についてである。1998 報文では南側のくびれ部と平坦部について「張り出し、あるいは、造

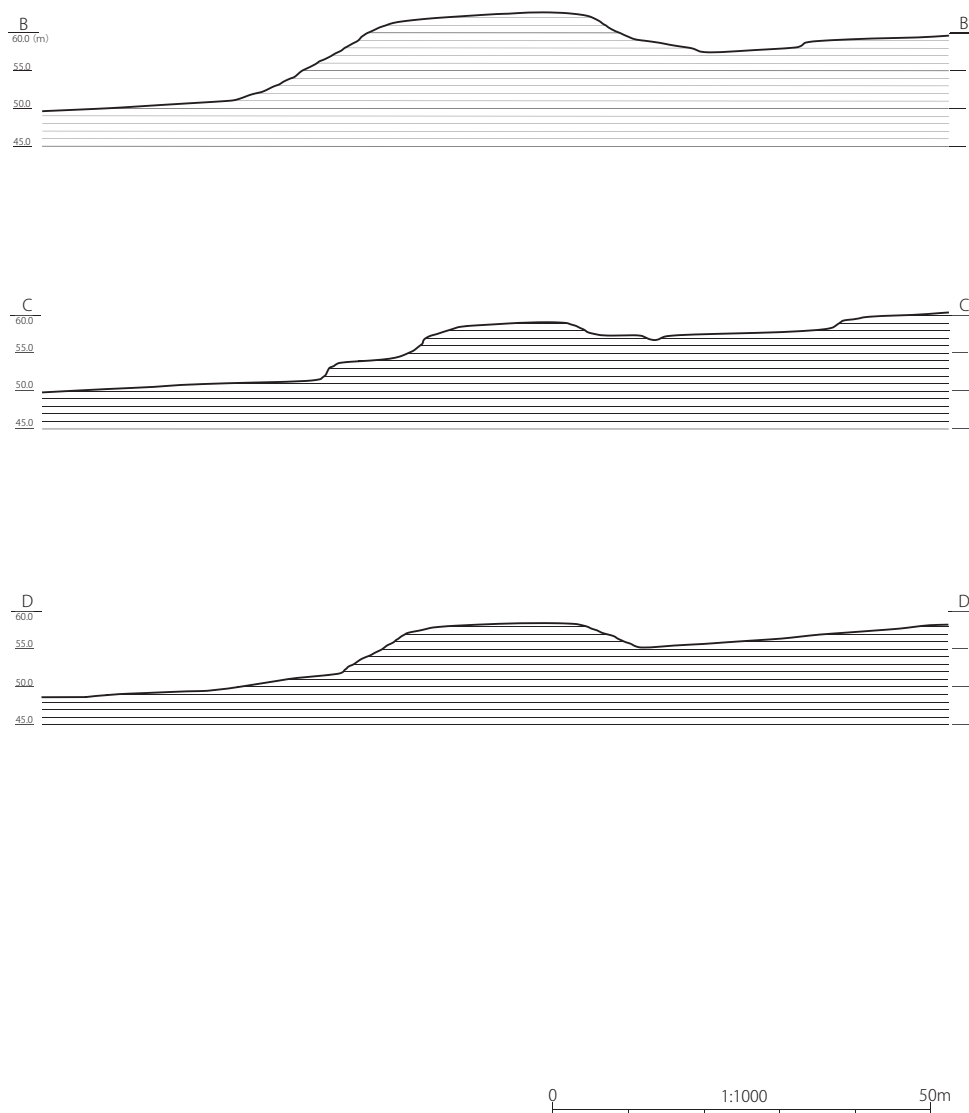
り出し状の施設の存在も考えられるが、このくびれ部付近では他の傾斜部分より等高線の間隔がせまく急傾斜を成すことから、このくびれ部分が大きく崩落した土石の堆積によってテラス状の地形が生じた可能性」を指摘している。おそらく後方部南側の墳裾とくびれ部の傾斜変換線がうまく接続しないことからこのように考えたと考えられる。



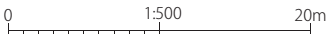
第181図 浅間古墳 測量図・エレベーション図

その問題を解決するために基壇の存在を指摘したい。前方後円墳における「基壇」とは一般的に栃木県域における後期古墳において特徴的に認められる「段築の第一段目のテラス部が広く基壇状を呈」する部分について示す際に使用される用語である（進藤 2002）。その「基壇」と今回、浅間古墳において指摘する部分については、その目的も時期も大きく異なるが今回は暫定的に使用する。

さて、結論を述べると浅間古墳は海からの視認性を強く意識して築造されており、南側のみ一段多く築造されていると考えられるのである。具体的にはくびれ部に明瞭に観察される傾斜変換線は、墳裾が良好に遺存した状況を示しており、標高 54.5m 付近が本来（設計上）の墳裾で、それが後方部南側においては基壇傾斜の上部に接続していると考えられるのである。



第 182 図 浅間古墳 エレベーション図



第 183 図 浅間古墳 墳丘復元図

前方部南側側面については土地改変が著しいが等高線や現地の観察からは後方部同様に基壇が存在している。

ただし、基壇の傾斜と墳丘傾斜との間に明確な傾斜変換は現状では観察することはできない。結果的にはくびれ部とその前面に広がるテラス状の部分は前方後方墳であることを明確に認識させるための強い意識のもとで作られた平坦面といえよう。現状では、海側にある基壇は前方部南側面の基壇や山側に向かってどのように収束するかは明らかではないが、等高線を見る限り後方部西側ではなく、墳丘の海側（南側）のみを高く見せるための造作であったものと推測される。

以上の分析から浅間古墳は基本的には後方部二段築成、前方部一段築成だが、基壇部分を含めると、南側のみは後方部三段築成、前方部二段築成と表現できる。

3 墳丘復元

墳丘復元をするにあたり、現状で観察（認識）することができる傾斜変換について改めて整理しておく以下のように整理される。

まず、後方部の後端である。墳丘斜面から自然地形に緩やかに移行すると考えられるが、等高線の密な部分を直線的に認識することができるため、この部分を後端ラインと判断した。後方部の海側（南側）の裾（基壇裾）と一段目の裾、くびれ部については前述の通りである。

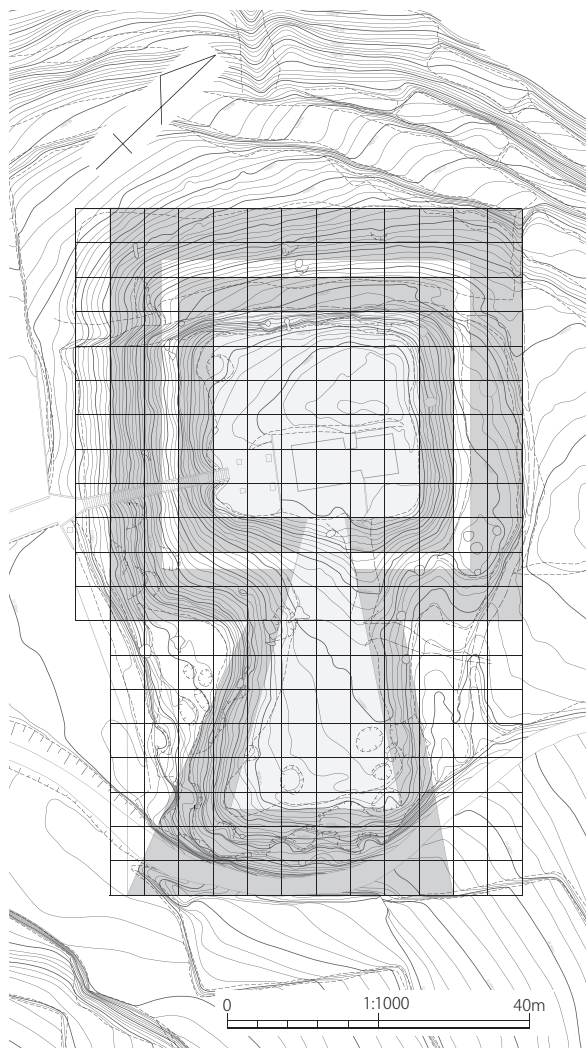
前方部前端はもっとも意見の分かれる部分である。前端斜面が土地改変により急傾斜になっており、現状の見目の傾斜変換よりも外側に本来の裾が存在したと考えられるが、それでも前端付近の農道よりも大幅に外側に広がるとは等高線からは考えられない。そのため、農道が、古墳の裾に沿って作られていると仮定し、農道の外側ラインを前方部前端として捉えておくのが妥当であろう。また、そのように考えると前方部は後方部に対して直角に接続していない可能性や、前方部前端が剣菱状の形態であった可能性も指摘できるが、今回は墳裾が主軸に直交する復元案を作成した。

後方部の山側は土地改変が著しいものの傾斜変換を直線的に認識することができる。ただし、そのラインが本来の墳裾をどれほど反映したものであったかは現状では明らかではない。

次に、後方部のテラス部について整理していく。海側（南側）において等高線が緩やかになる部分があり、この部分を一段目のテラスと推測した。また、前方部墳頂平坦面の傾斜変換は前方部前端の墳裾同様、後方部に対して直角ではなかった可能性もある。後方部の二段目は等高線が急になるラインからとし、後方部の墳頂は大きく改変されていないという前提で復元した。

以上を総合して、以下のように復元した。

全長 90.8m、後方部長 54.5m、前方部長 36.3m
後方部高 11m（南側基準）・4.75m（北側基準）、前方部高 7m（南側基準）・2m（山側基準）



第 184 図 浅間古墳の築造企画

築造規格については沼澤豊氏の研究成果（沼澤 2005a・2005b・2005c）を参考にして、後方部 12 等分割方法を採用して検討した。その結果、復元される墳丘ラインと 12 等分割方法が極めて適合的であるとの結論に至った。後方部 12 等分割では、前述の基壇を含めず方眼をあてはめたが、海側の基壇部分は 1 区画分に相当することが明らかとなった。また、後方部墳頂平坦面は 6 区画、二段目の墳丘開始ラインが 8 区画に相当する。テラス幅は 1 区画の半分の幅に相当すると復元されたが、これは 24 等分割の規格が働いている可能性がある。また、くびれ部幅も 6 区画、前方部前端ラインは主軸に直交しない可能性もあるが、20 区画に一致している。

さらに本論ではあまり触れなかったが、後方部山側の墳丘に沿って存在する周溝状の落ち込みは 3 区画分を示しており、自然地形と墳丘との分断を図ることを目的とした周溝と評価することもできよう。

おわりに

本論ではこれまでの静岡大学によって行なわれた詳細な測量調査成果を基点として海浜型前方後方墳である浅間古墳の最大の特徴である海側（南側）からの視認性の解釈にあたり基壇というものの存在を指摘することでこれまで示されてきた復元図と若干異なるものを提示した。今後、「浮島ヶ原ネットワーク」（佐藤 2018）に含まれる高尾山古墳や神明塚古墳、東坂古墳などの古墳もあり方も再検討し、東駿河・伊豆における前期古墳の歴史性をより重層的に解釈していく必要があるだろう。

参考文献

- 佐藤祐樹 2018 「駿河・遠江における古墳出現期の様相—浮島ヶ原における首長系譜を中心に—」『東海における古墳出現期の様相』2（第 30 回考古学研究会東海例会資料）
- 静岡大学人文学部考古学研究室 1998 「静岡県富士市 国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』（静岡県内重要遺跡詳細分布調査報告書）静岡県教育委員会
- 進藤敏雄 2002 「『栃木県』の後期古墳の地域性」『前方後円墳の地域性』（第 7 回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料）
- 広瀬和雄 2013 「海浜型前方後円墳」『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団
- 内藤晃 1958 「遠江駿河の前方後方墳」『私たちの考古学』17 考古学研究会
- 沼澤 豊 2005a・2005b・2005c 「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）・（中）・（下）」『考古学研究』第 89 巻第 2 号・同巻第 3 号・同巻第 4 号